

## ◆招待講演報告 2 Prof. Mel Slater

多田隈理一郎

(東京大学)

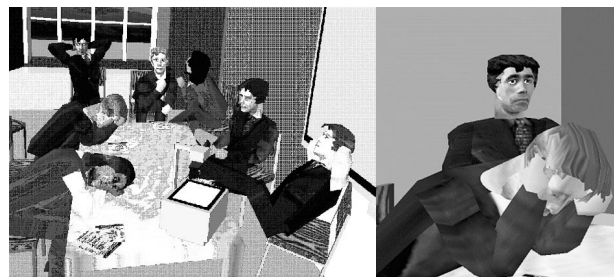
12月6日の招待講演:「Real People Interacting with Virtually Real People: Some Experiment」は University College London の Mel Slater 教授 (図1) によるものであった。



図1 Slater 教授

この講演は、Slater 教授の研究室で行われている精神治療(セラピー)の研究で、大衆恐怖症や偏執狂の精神治療の道具として VR 技術を応用した実験に関するものであった。アメリカでは、演劇を使う心理療法としてドラマセラピーがよく使われており、そこではリアルさと没入感がセラピー効果の重要なポイントとなる。この研究においては、図2(a),(b) (出典: Slater 教授の研究室のホームページ) に示すような CG で表現された聴衆のいる VR 空間を前にして、スピーチを行ったりする実験が行われていた。図2(a),(b) は、聴衆が退屈している Negative な場合で、足をテーブルに投げ出したり、別の聴衆と私語をしたり、寝ていたり、部屋から出て行ったりする様子が示されている。逆に、講演で示された Positive な場合においては、全ての聴衆が講演者の方を笑顔で凝視し、目を見開き、時々うなずいたりする例が示された。これらのアバターは大変コミカルで、この講演の実際の聴衆が笑いながら真似するほどであった。

Slater 教授は、最終的にはアバターが笑っていたら観察者も笑い出し、アバターが泣いていたら観察者がもらい泣きしてしまうようなリアルなシステムを目指されているそうで、映画「ブレードランナー」のレプリカントや、同じ



(a) (b)

図2 実験で用いられる聴衆のアバター

く「AI」のデイビッド少年を引き合いに出されていた。

大衆恐怖症や偏執狂のセラピー分野で利用できるほどのリアリティのあるアバターを開発していくのは困難な課題であろうが、少なくとも現時点においても、学生が国際学会において英語でプレゼンテーションをする練習などには極めて有効なシステムであるように思えた。

(<http://www.cs.ucl.ac.uk/staff/m.slater/index.htm>)

## ◆招待講演報告 3 岩井俊雄教授

柳在鎬

(東京工業大学)

12月5日(木)、ICAT 二日目のディナートークはメディアアーティスト岩井俊雄さんのご講演だった。岩井さんは東京大学先端科学技術研究センターの教授でもあり、技術とアートを結ぶ、新しいメディアアートを創っている。

岩井さんのレクチャは短い映像から始まった。それは NHK で放送された事もある“Piano-as image media”という作品だった。静かな曲想の、ピアノ演奏者の柔らかな指の動きから音が出、それが後ろにあるスクリーンで光に変わって空の方に飛んでゆく。スクリーンに映された光は演奏の強弱によって強くなったり弱くなったりしながら最後は雪になって空から降る。その映像のピアノの一曲が終わると、その場にいた全員は拍手を送った。

さらに次はもっと素晴らしいものが待っていた。まず、岩井さんは小さなミュージックボックスを紹介した。ミュージックボックスには穴があいた紙が入るところがあり、紙を入れ、つまみを回すと音楽が流れる。岩井さんは穴の模様を見せながら、整然とならんだ穴の模様が、音楽を単に聴覚的に聞くのではなく、音楽のリズムとハーモニーを視覚的に見せてくれると説明された。そ

して、それからヒントを得て創った様々な作品を見せてくださった。その代表的な物は「テノリオン」と言うものだった。誰でもいつでも使いやすくするために創ったその「手乗り音」のいろんなバージョンを見せた。

岩井さんの作品はただ光と音楽にとどまらないで、時間の遅れを利用した映像の紹介へと続いた。それはまるで3次元の実世界と時間を結んだ4次元の世界を見ている感じであった。原理はそんなに複雑ではなかったが、その効果は素晴らしかった。お客さんの中で一人に参加してもらってその場で見せた映像と、後ろにあるドアを開けたあとで閉めて見せた映像には感嘆する以外にはなかった。芸術家は確かに小さい発見から素晴らしいものを創るものだと感心した。

岩井さんが使った技術は、考えるとそんなに有用な技術ではない。一方、むしろ技術者として見たら無駄なものかも知れない。しかし、芸術家の手によって再創造されたその技術は、素晴らしい作品となり人々を楽しませてくれる。



講演の様子



講演される岩井先生とミュージックボックスの紙

## ◆パネルセッション報告 Telecommunication, Teleimmersion and Telexistence: Seeking a New Paradigm for the Future 杉本麻樹

(科学技術振興事業団 / NTT)

会場となった東京大学山上会館大会議室は、ほぼ満席となり、ICAT参加者のパネルセッションに対する高い関心が伺われた。このセッションでは、パネリストとして、館教授(東京大学)、Andries van Dam教授(Brown University)、Henry Fuchs教授(The University of North Carolina at Chapel Hill)、Thomas A. Defanti教授(University of Illinois at Chicago)が登壇し、各教授が研究プロジェクトの紹介を行いながら、テレコミュニケーションとテレイメーション、テレイグジスタンスをテーマとしてディスカッションを行った。アーキテクチャの進歩によるコンピュータグラフィックスの表現能力向上とこの分野との関わりといった事も交えつつ、Andries van Dam教授、Henry Fuchs教授の研究分野でもある遠隔医療に関する話題にも多くの時間が割かれた。また、遠隔医療等に関する分野においても重要な要素であるハプティックインタフェースについてのディスカッションの中では、来場されていた岩田教授(筑波大学)が、ハプティックインタフェース研究の専門家としてコメントを求められるといった場面も見られた。

本セッションの登壇者は、ICAT2002に先だってJST/東京大学 館 CREST プロジェクト主催で行われたクレストシンポジウムの講演者を中心としていたため、両方に参加された方には特に興味深いセッションになったと思われる。



パネルセッションの様子